小野寺淳・平井松午　編
『国絵図読解事典』
創元社　2021年2月　320頁　8,800円＋税

国絵図といえば，伊能忠敬が真っ先に思い浮かぶ。その伊能忠敬が江戸時代に全国の海岸線をくまなく歩いて測量し1821年に完成させたのが「日本沿海輿地全図」（伊能図）である。その200年後の記念すべき2021年に小野寺淳・平井松午編の『国絵図読解事典』が出版された。本事典は，国絵図に関係する用語を解説する辞書ではなく，地理学，歴史学の専門家による論文集といってよい解読書で，総論24本，各論26本，コラム9本からなっている。以下○印の数字で示した①～㊿は解読文，⓪は「はじめに」，c①～c⑨はコラムの記載順番号である。

伊能図は当時の日本があまりにも正確に描かれているが故にシーボルトの目にとまり，それを手渡した幕府天文方の高橋景保が国家機密漏えい罪で捕えられ獄死し，シーボルトは国外追放されるという悲劇（シーボルト事件）が起きた（⓪）。この事件が気になったので，最初にページを繰ったのが㊶「伊能忠敬と国絵図」と㊷「シーボルト本の手書き彩色国絵図」で，事件の詳細は記されていないが，伊能もシーボルトも絵図を集める地図マニアであったことを知った。

本解読事典の執筆者名と59本すべての題目をそのまま記すのは割愛するが，一部まとめて紹介したい。

総論編の最初の①「江戸幕府による国絵図・日本総図編纂事業」によると家康をはじめとする歴代の徳川幕府の将軍が諸国に対して国絵図の作成を命じている。慶長9年（1604），寛永9年（1632），正保元年（1644），元禄10年（1697），享保2年（1717）になされ，その後しばらく途絶えるが，天保9年（1838）に元禄国絵図に追記した天保国絵図が完成している。

これらの詳細が2本目以降の解読文で，カラーの図入りで読み解かれている。②郡絵図との比較，③多様な地図仕立て，④日本総図の作成，⑤国単位で作成された奥州・九州・四国の寄絵図，⑥関東の六十余洲図，⑦郷帳（村高記載）と照合，そして⑧では道帳（陸路と海路）と併せて読まれている。

9本目からは，国絵図の記載内容を引き立たせるための手立てとして，⑨料紙の使い分けとこだわり，⑩方位表記と凡例，⑪彩色について多彩に論じられている。

12本目からは，国絵図作成のための手段として，⑫測量，⑬城絵図との比較，そして作成の見本とされた⑭寛文期の上野国絵図，⑮各藩の領内図，⑯仙台藩の絵図元の記録，⑰毛利家の防長両国絵図，⑱国境縁絵図と海際縁絵図，⑲阿蘭陀流町見術，⑳望視方法が詳述されている。

21本目からの3本は国絵図発展編といってよかろう。㉑弘前藩・盛岡藩の天保国絵図改定事業，㉒蝦夷図，㉓琉球国絵図が美しく紹介されている。

総論編の締めくくりとして，㉔研究者仲間が大紙面の国絵図を広げて調査している風景写真を載せて国絵図研究の歩みが（c⑨でも）俯瞰されている。

各論編に入って，最初の解読文で㉕江戸幕府撰国絵図以前の国土図が古代に遡って解説され，中世の行基図がわが国最古の日本全図であることを知る。総論編で示された大テーマを補充する形で㉖岡山藩の国絵図の発掘，㊲手書きの彩色常陸国絵図，㊳刊行された国絵図，㊴河内の国を事例とした名所図会との比較，㊵改正日本輿地全図と国図，などにより多々の国絵図が全国に存在していたことに目を見張る。そして国絵図測量の主役である伊能忠敬が㊶と㊹に登場し，㊷でシーボルトが入手した国絵図一覧が載せられている。

記載内容では，㉙街道，㉚舟路，㊱海の難所から名所になった「鳴門の渦潮」，そして新たに注目された㉗㉟開発と㉘山論では「国境」「郡境」に注意が払われている。山にまつわる描写としては㉞で庄内地域の樹種の違いも描かれた森の景観が読み取られている。

また今日的テーマでもある「災害」について，慶長豊後地震の被災地「かみの関」を国絵図から比定したのが㉛で，朝鮮通信使などの記録を基に被災地が「周防国上関」ではなく，「豊後国佐賀関」であったことが論証されている。C③では寛文2年（1662）に発生した日向灘地震について，地震前・後の絵図が載せられている。地震後の絵図には海岸近くが広範囲に海入した沼地になっており，沼地北の南方村が，津波で流されたのであ

ろうか，村名の文字が消え小判印の村枠だけ不気味に残っていた。だが，幸いなことに170年後の天保飫肥領絵図に村名が復活していた。同じ地区で時代の違った絵図を比較することで環境変化を知ることができた。

様々な災害から被災者を救うという意味でも寺社の役割は大きい。故に国絵図でも寺社の存在は重視して描かれているであろう，と思ったが，㉜ではそうでもなく，有名寺社でも描かれ方がまちまちであることが論じられていた。日光と厳島社（c⑤）は立派に描かれていたが，京都では洛外で多く記されていたのに，洛中では東・西本願寺を含めて全く描かれていなかった。伊勢神宮では鳥居だけで建物は描かれていない。20年に1度式年遷宮をするからであろう，とのことである。高野山では町場を示す四角枠に高野山と書かれただけで，寺院というよりも町場として認識されていたであろう，と推測されていた。霊山であることの描写は「堂舎」があることで，立山や熊野大峰山には山頂に向かう修験道の道に「堂舎」が描かれていた。

そして幕末，明治時代に入ると，国絵図は軍事色に染まっていく。㊺では砲台（台場）が因幡・伯耆二国（鳥取県）の幕末の絵図に多数記されていた。㊼で明治の城絵図を見ると，「陸軍省城絵図」と称されたように，城郭に陸軍の基地が設けられるようになった。明治新政府は廃藩置県（1871）を行い，府県を治めるためには境界をはっきりさせる必要があった。その際に国絵図が利用されたことが㊻で述べられている。

こうした情報の宝庫である国絵図を，いかに撮影し（㊾），いかに展示するか（㊿），そして若い世代にいかに伝えていくかが，執筆者の共通した願いであると思う。その願いを実行したのが㊽の「絵図を活用した『地理総合』の授業の提案」である。近年の水害被災地が，「元禄下総国絵図」では飯沼という沼地であり，「天保下総国絵図」で飯沼新田として開発されたところだったことを歴史絵図で読み取ったうえで，現地観察を行うという防災学習が紹介されている。こうした地理総合の授業ができる歴史地理学専攻の高校教師が倍増することを願う。

最後になったが，勇気を持って提言してくださったのが㉝の国絵図に描かれた被差別「村」と巻末の「古地図・絵図の公開について考える―被差別身分呼称の問題について」である。

評者はこの20数年地元名古屋の自治体誌の編纂にかかわってきたが，名古屋城下町の中心部にある「獄舎」は載せないでほしいとか，村絵図にある三昧（火葬場）には触れないでほしいとか，何回も注意された。「獄舎とか三昧とかも受け入れる温かい町が名古屋である」との願いは通じなかった。個人への人権侵害はあってはならないが，史実は忠実にという原則は守っていきたいと思わせてくれた㉝であった。

さて，上記50本の解読文と9本のコラムには，当然のことながら題名（数本は見出し）に「国絵図」という文字が入っており，著者の関心事が国絵図からいかに読み取れるかが記されている。ところがそこに載せられた国絵図は，タイトルからは思い浮かばなかった情報も提供してくれる。例えば，評者の関心事に「災害」があり，㉛「国絵図にみる災害」は熟読させていただいたが，㉟の「国絵図に見る『大坂川口新田』の開発」にも，災害記載があった。解説では新田地ゆえ自然災害による過酷な被害を受けたとある。そこで図3「天保期の西成郡湾岸部」の絵図を見たら，海に突き出た新田に「波除山」（瑞賢山），「目印山」と命を救う「山」があるではないか。前記の地理総合学習で，新田地帯は水害の危険性が高いことを学んだが，その先の防災対策はどうだったか，その一つが「山」であったことを㉟で学ぶことが出来よう。

読者は解読文とコラムのタイトルを目にして読むが，上記のように自分の関心事がその題目と異なった題目の中に出てくることが多々ある。それを知るために次のような「人」と「図」と「地形」の索引があると助かると思った。

1）「人」について，シーボルトを例にあげれば，題目が「シーボルト本の手書き彩色国絵図」（㊷）のほかに，⑨の「国絵図と料紙」にも登場しており，シーボルトが「和紙見本帳」を調査していたことに驚いた。

行基，伊能忠敬など著名な絵図作成者の引用のされ方はもちろん，国絵図作成命令者である将軍名，協力者である藩主等の登場とその貢献も知りたい。ここではシーボルトにかかわった人を㊷か

らすべて拾い出すと，高野長英・二宮敬作（長崎で西洋医学をシーボルトから学ぶ），桂川甫賢・宇田川榕庵（医師・学者），最上徳内（蝦夷地探検家），高橋景保（幕府天文方），J・ホフマン（オランダの東洋学者），松平乗命・松平乗保（美濃岩村藩８代藩主・５代藩主）が出てくる。この中で評者が知っていたのは高野長英ただ一人であった。この分で行くと本事典全体では初見の人が多数出てくるであろう。どこかで気になった人，たとえば幕府天文方の「高橋景保」って誰だろうと思って，索引があればそれを引いて⓪（1頁）をみたらシーボルト事件で断罪された人だったのか，と印象を新たにする。

国絵図と関係した人としては習わなかったであろう著名人と，その出会いを楽しむこともできる。

a.豊臣秀吉：戦国の世を抜け天下統一を進めるにあたっては，税の対象となる「土地」を把握せねばならないとして「太閤検地」を始めたことは知られているが，検地と同時に郡図提出命令を出していた（①）ことは知らなかった。徳川幕府を開いた家康の国絵図提出命令に繋がっていくがゆえに，秀吉の功績は大きかった。

b.新井白石：㉓の「琉球国絵図」と「琉球国変地改目録」に出てきた。このタイトルの副題に「悪鬼納」から沖縄へ，とあったが「悪鬼納」が読めなかった。解説文で「オキナワ」とルビがあり，それが「沖縄」嶋に代わっていった経緯が述べられ，結論でびっくり。朱子学者の新井白石がオキナワの命名者であった。

２）「国絵図」の他に多数の絵図名が随所に出てくるので，すべての〇〇図の索引も欲しい。⑥のタイトルに「六十余州図―関東を中心にして」とあり，六十余州図とは，日本の各旧国を1国単位で１枚の絵図に描いた68枚一揃えの国絵図とある。となると，日本68国のどこの国絵図が本事典で言及されているか知りたくなる。⑥では，伊予，武蔵，下総，尾張，播磨，出羽，常陸，若狭，近江，山城，隠岐，壱岐，対馬，備前，大隈，薩摩，遠江，安房，上総，上野の20国名が出ていた。副題に関東を中心にして，とありながら，多数の国が出てくる。これらの国は他所でも多々出てくるのでモデルとなる国であろう。その一方で１度も言及されなかった国があれば，その理由が知りたくなるし，今後の研究課題となろう。

国絵図にはその基になる郡絵図が重要であると随所で語られている。スケールの関係で郡絵図情報がすべて国絵図には載せられない。大変な量になるかもしれないが郡絵図の索引リストもあればと思った。

国絵図，郡絵図以外のすべての絵図のリストアップとその索引も国絵図を理解するうえで必要である。例として①～③に出てきた図名を拾い出すと①控図，再提出図，清絵図，下図，カラー印刷図，城絵図，写図，縁絵図，端絵図，涯絵図，海際縁絵図，日本総図，大日本沿海輿地全図，切図，懸紙修正図，②地籍図，③慶長図，寛文再提出図，内見図，高付絵図，国境縁絵図，海際縁絵図が取り上げられていた。

国絵図と直接結びつく清絵図（幕府大目付から提出を命ぜられた大名や代官等の絵図元が献上した国絵図），縁絵図・端絵図・涯絵図（国境や郡境を示した図）などはもちろん重要だが，どんな図を控えにしたのか，基にしたのか，写したのか，それらを知ることも重要なので控図，下図，写図の索引もあれば，国絵図作成過程の苦労が実感できる。

３）豊臣秀吉は諸大名に郡絵図の制作・提出を命じた際に，海・山・川・里・寺社・田数・境界・橋などを詳細に記すことを求めた（②）。本解読事典でいかに語られているか，これらの索引がほしいところであるが，主要地形としての「海」と「山」を例にとって，国絵図読みを楽しんでみよう。

「海」の文字が解読文のタイトルに出てくるのは⑱「国境縁絵図と海際縁絵図」，㊱「絵図にみる海洋現象『鳴門の渦潮』－海の難所から名所へ」，㊺「幕末の絵図に描かれた因伯二国の台場―『因伯両国海岸調査絵図』と『御両国之図』」の3本で，見出しでは㉕の「ポルトラノ型海図」，㊺「幕末期の海岸防備施設としての台場（砲台）」，c⑧「沿海浅深絵図『淡州海難之図』」である。

⑬では三方を海に囲まれている周防・長門両国が海際絵図を出して国境折衝に役立たせた経緯が書かれている。㊺では因伯二国（鳥取県の因幡と伯耆）とあったので，ロシアに近いから，台場

（砲台）を図示して防備したのかと思ったが，本文中に江戸湾，大阪湾，下北半島にもあったことが記され，幕末日本の異国船に対する恐怖が日本全土で見られたことを知った。C⑧では江戸幕府が海防体制の一環として，沿岸諸藩に対して，海岸絵図の作成を求め，海岸線の長さや沖合の水深，番所や大砲台場などの海防施設を図示することを指示した。徳島藩では，明和8年（1771）にロシア船が現れてから，近海に異国船が出没したため，海防体制を強化していったそうである。㊱には海の難所として鳴門の渦巻きの図が多数載せられているが，異国船はその海の難所を難なく乗り越えてきたのである。

㉕のポルトラノ型海図とは，13世紀以降イタリアを中心に使われていた羅針盤方位による海図のことで，江戸時代初期の日本図として西洋で作成された地図が日本人によって模写され使われたそうだ。32本の方位線が放射状に書かれ，経緯線が引かれ，日本列島の形状が当時の江戸幕府撰日本図よりも優れている。無名の航海者がこうした作図ができる知識をもっていたことに驚かされる。

「山」が日常生活の上で大切であったことは，㉞「正保度の領内図にみる植生表現」に詳しいし，領地争奪の山論になったことは㉘「国絵図と山論」に詳しい。解読文のタイトルか見出しに「山」が出てくるのは，この2論の他に⑳と㉜がある。⑳では，幕府が各地の領主に対し，自国の国境より遠望して遠くの目立つ山「見当山（みあてやま）」と見当山を望視する起点となる「望視山（ぼうしやま）」も報告させたとある。国絵図を正確に作成するには目印となる「山」の存在が重要であることを教えてくれた。㉜では霊山が取り上げられ「山」が聖地になることを確認させてくれた。

タイトルにも見出しにもない解読文の中で「山」が重要な役割を果たしていた例を挙げておこう。一つは⑯「元禄国絵図改定に関する絵図元の記録―仙台藩の場合」に「細倉山は伊具郡ではなく，仙台領宇多郡駒ヶ嶺村と境を接する相馬領の里山であることが判明した（中略）細倉山の帰属は相馬領，山野利用は双方の入会」と論じている。山の多くは境界領域にあるので，こうした事例は貴重である。㊹では金山，銀山が出てきて山の価値を高めている。そして繰り返しになるが，山岳地帯でも丘陵地でもない新田地帯に「山」があり，防災の役割を果たしていたことを強調しておきたい㉟。

最後になったが，本書を2度3度と読み返すうちに，タイトルにはなかった洪水，地震，火事といった災害情報が至る所で載せられていたのに気づき，上記で触れはしたものの，再度取り上げて，本書評の〆としたい。

国絵図作成時に，道路と海路（舟路：しゅうろ）を詳細に記した道帳（みちのちょう）も提出するように求められていた。坂道の距離・道幅や牛馬通行の可否と共に，渡河方法や洪水時の対応なども記されたという（⑧）。正保元年（1644）に国絵図と共に城絵図の提出が求められ，以後，諸藩では多様な城絵図・城下町絵図が作成されるようになった。⑬では寛文2年（1662）に発生した近江・若狭地震で被害のあった膳所城の破損状況と修復計画図が載せられている。

国絵図残存にとって最大の危機は火事であった。各国から献上され江戸城に保管された国絵図は，その一部が明暦3年（1657）の大火で焼け，大正12年（1923）の関東大震災でも焼失した⑮とのことである。江戸へ運んだ毛利家所蔵の元禄国絵図控図も安永元年（1772）の火事で焼失した（⑰）。

こうした災害にもめげず保管されてきた多くの国絵図は日本の宝ともいえ，それを多角的に解読されてきた本書執筆の研究者の方々に敬意を表するとともに，海外への発信も含めてさらなる絵図研究の進化を期待したい。

（溝口常俊）